

# 地球の最後と「最後の人類」

## ——消滅を前提とする倫理のために——

前 川 健 一

### 一 はじめに

環境問題の難しさは、時間的・空間的に、従来の人間の想像力をはるかに超えていることにある。つまり、現在の行為の結果が、ただちに目に見えるものではなく、時間的にも空間的にも遠く離れた他者に影響を与えるのである。空間的な影響については、視覚的に地球を一望できるようになったことや経済のグローバル化の進展も手伝って、今日では容易に理解することができるようになった。もちろん、具体的な取り組みということになれば、国家主権をどう乗り越えるかとか、先進国と発展途上国の格差をどうするかといった、手続き上の問題はあるにしても、地域的ないし全地球的なレベルでの取り組みについて早晩合意はできていくであろう。決定的に深刻なのは、時間的な問題である。これはいわゆる世代間の格差という形をとる。我々が現在、資源を消費し、環境に悪影響を与えていることによって、後続する世代はその分だけ悪化した環境の中で暮らさなくてはならない。これは逆もまた真であって、我々が今日環境問題に対処を迫られているのは、先行する世代が無思慮に資源を消費したせいだとも言える。環境問題に関して世代間責任が深刻な問題となるのは、影響が出た段階では、当事者は既に存在しないからである。後続する世代は、我々に責任をとらせることができないし、我々も先行する世代に責任をとらせることができない。通常の倫理において、我々が自分たちの行為に責任を持たねばならないのは、最終的には損害を与えた者からの何らかの報復があるからであ

る。直接的に「被害者」から報復がある場合もあれば、法律などのシステムを媒介にする場合もあるにせよ、何らかの報復の存在が倫理の「重し」となっている。世代を異にする場合、このシステムが作動しない。私たちは、原理的に私たちに報復ができない存在者に対して、私たち自身が予見できないようなかたちで、害を与えるからである。ここに、これまでの共時的な倫理を乗り越える世代間倫理が必要とされる所以がある。

素朴に考えても、自分だけが様々な便益を享受して、「あとは野となれ山となれ」ということでは、あまりにも無責任に見える。自分たちの子孫のことを具体的に考えてみた場合、資源が枯渇してしまったり、自然環境が悪化した劣悪な環境で自分の子孫が暮らさなければならないといったことは、あまり想定したくないことであろう。このように考えれば、世代間倫理という発想を支持する人は多いであろう。

しかしながら、世代間倫理というものが、具体的に我々の行動に何をもたらすかを考えると、そこには様々な隘路がある。本稿では、そのような隘路を探し、世代間倫理の根底にある「人類の存続」という発想そのものを批判的に乗り越える道を模索したい。

## 二 先行世代の後続世代への責任

今日、我々の環境認識の根底にある（ないし、あるべきである）のは、地球環境の有限性ということである。もはや我々は、たとえば十九世紀の人々のように自然の回復力や生産力を無邪気に信じることができない。そして、環境や資源が有限であることを前提とすれば、次の世代に全く何の影響も与えないような生活は不可能である。少なくとも化石燃料や鉱物資源に関して言えば、我々が使った分だけ、確実に埋蔵量は減る。減るスピードを遅らせることはできるにしても、いつか無くなることは、はっきりしている。土壌や水、空気などの自然環境にしても、現在の文明を前提にする限り、汚染・消耗が蓄積していくことは避けられそうにない。今日考えられている様々な手段をフルに活用しても、せいぜい現状維持がせいじっぱいで、大幅な改善は望めそうにはない。しかも、

放射性廃棄物のように、きわめて長期にわたる影響をもたらすものすらある。要するに、次世代への責任ということを考えれば、我々が「負の遺産」を次世代に託すことは、かなり明瞭である。「負の遺産」を減らすことはできるにしても、ゼロにすることは考えにくい。もちろん、資源を利用して達成される技術革新や新しい科学上の知見は「プラスの遺産」であるかも知れない。しかし、燃料や材料が減少してしまえば、そうした新しい知識を活用する余地も狭められてくる。石油がなければ自動車は動かないし、電気がなければコンピューターもただの箱である。

そもそも「負の遺産」を減らすべきであるのは、人類が存続していくためである。しかし、逆説的なことに、人類が存続していくかぎり、「負の遺産」は累積的に後続の世代にのしかかることになる。個々の世代は「負の遺産」を減らすように努力すべきだと言ったところで、長い期間をとって見れば、必ずどこかの段階で「割を食う」世代が出現する。たとえば、“石油を現在のペースで使い続けていくと、五十年後に無くなる”と仮定してみよう。これを石油消費の抑制や代替エネルギーの活用などによって、枯渇までの期間を百年に延長したとする。これは現在の世代から見れば一見良いことのようにだが、百年後の世代から見れば、問題の先送りに過ぎないということになるだろう。つまり、影響の出方を遅らせるとか、負担を少なくなるといった対処法では、世代間の不公平が必ず生じてしまうのである。

最もラディカルな対処法は、再生不可能な資源は一切使わないというものである。もっとも、これは実質的に石器時代以前に戻れと言うに等しいのであって、多くの人の支持は得られないだろう。多くの人が望んでいるのは、現在の便利な生活水準は維持しながら、自分が生きているうちとか、自分の子孫の時代に、急激な自然環境の悪化が生じることは避けたい、といったレベルのことである。しかし、このような態度は結局のところ、拡大された現在中心主義に過ぎないように思う。つまり、現在の我々が感じる将来の不安を和らげるための環境論に過ぎないのである。環境問題が要求する時間感覚は極めて長大であるにもかかわらず、多くの環境論はそれを捉え損ねているように感じられる。

我々が直面している状況は、一種の「ババ抜き」のようなものである。自分の番で「ババ」（決定的な危機・破滅）を出さずに済むにしても、どこかで誰かが必ず「ババ」を引く。世代間倫理を考えると、究極的には、この「ババ」を引くはめに陥る世代について考えることである。しかし、それは何を意味するのだろうか。

### 三、人類の存続と消滅

次世代への責任を重要な倫理原則とすることを提唱したハンス・ヨナスは、その原理を「人間が住むにふさわしい世界が、未来もずっと存在しなければならない」と要約している<sup>1)</sup>。これは様々な環境保護運動の基本的な考え方と言ってよいであろう。しかし、端的に言って、この命題は間違っている。なぜなら、いま人類が生活している、この世界は必ず消滅するからである。これは、哲学的な問題ではなく、単なる事実の問題である。人類がいくら環境保護にとめても、必ず地球は消滅するし、人類も消滅する。地球について言えば、人類が今後一切二酸化炭素を出さないとしても、五億年後には地表温度を二酸化炭素で調整するメカニズムが破綻し、温度上昇により二十億年後には海水が全て蒸発すると推定されている。また、五十億年後には太陽が膨張して地球の軌道付近まで達すると考えられている<sup>2)</sup>。地球だけをとってみても、太陽との関係をとってみても、いずれ地球は人類が生存できる環境ではなくなるのである。さらに、こうした地球の大変動とは無関係に、人類という生物種の絶滅がもたらされる可能性もある。近年のゲノム研究の結果、Y染色体は塩基置換率が他の染色体よりも二倍以上高く、大きな構造変化も高頻度で起っていると考えられている。このペースで置換や構造変化が起っていくと、Y染色体は機能を変え、消滅してしまう可能性があると考えられている<sup>3)</sup>。Y染色体はオス（男）を成立させるので、Y染色体が消滅すれば、オスがいなくなり、当然、いずれ種は絶滅することになる。

もちろん、こうした人類の消滅の可能性は、はるか未来の話である（ちなみに、現生人類が誕生したのが15万年～16万年前と考えられている）。このような超長期的な

レベルでの「人類の絶滅」が、想像困難であり、我々の行動に直接影響しないように思えることは確かである。『自然に対する人間の責任』の中で、パスモアは、人類の究極的消滅というヴィジョンが、必ずしも人間の動揺を誘うものでもなく、直接的に将来世代への責任感が生じるわけでもない、と論じている<sup>4)</sup>。しかし、世代間倫理という観点から考えると、このような対応は極めて不十分なものに映る。というのは、世代間倫理の一つのポイントは、世代間の公平という点にある。先行する世代が楽しく過ごした分、後続する世代にツケがまわるようなことは避けねばならない。このような公平の達成にあたって、人類が未来にわたって永遠に続くと考えるか、「終わり」があると考えるかで、対応は大きく異なる。もし人類が永遠に続くなら、世代間の公平というのは、本質的には、不可能な理念である。どれほど節約しても、化石燃料も鉱物資源も、いづれかの段階で枯渇する。枯渇する前の世代と、枯渇した後の世代を比べてみれば、不公平は避けられない。しかし、もし人類の歴史に「終わり」があり、しかもそれが予測可能なものであるなら、話は変わる。非常に単純に考えれば、人類に残された時間で、残された資源を割れば、世代間の公平は達成される。もちろん、人口の増減や、環境の累積的悪化などを考慮して、後続する世代に、より多くの資源が残るように按配するといったことも考慮されるべきであろう。また残された時間をさらに短縮しないように行動することも必然的に要請されるであろう。逆説的ではあるが、世代間の公平という観点で見れば、人類に「終わり」があることを前提にしなければ、世代間倫理は成立しないのである。

この場合、「終わり」は変更できないという前提に立っている。しかし、可能な限り、人類の存続を延長すべきだという考え方もありうる。たとえば、Y染色体の変異によって人類が絶滅するなら、遺伝子工学を利用してY染色体の変異を食い止めるといったことが考えられる。さらには、Y染色体が消滅したとしても、クローン技術によって新たな子孫を残すといった選択肢もありうる。

また、地球が居住不可能になる場合であれば、地球以外の場所に人類が居住するという選択肢がありうる。もっとも、どれほど宇宙工学が進歩したとしても、或る程度の人数（他の惑星で生殖が可能な程度の）を航行させるには、莫大な

資源が必要となるだろう。もし、その資源を確保するために現在の消費を抑制しなければならぬとすると、それはとても馬鹿げたことのように思える。しかし、何が「馬鹿げている」のかは容易に説明ができない。それは単に我々の想像力の貧困を物語っているのに過ぎないのかも知れない。存亡の危機に立っている未来の人類のために、何故我々は手を差し伸べてやれないのであろうか。なぜ未来の宇宙船建設のために、石油を使うのをやめようという気にはならないのだろうか。

以上の方策は、現存する人類の「歴史(ないし文明)」を延長するという前提に立つものである。もし人類という「種」の存続を第一義とすれば、もう少し簡便な方法もありうる。大量の精子や卵子あるいは受精卵を冷凍保存して、宇宙へと送り出せばよい。もしかして知的な生命体がそれを手に入れば、そこから人類を発生させることができるだろう。さらには、人類個体にこだわる必要すらなく、ゲノム情報のみを何らかの形で、他の知的生命体に伝達することも考えられるだろう。もし他の知的生命体が十分な科学技術を有していれば、ゲノム情報から人類を復元することも可能かも知れない。

しかし、大抵の人々は、このようなかたちでの人類の存続を、それ自体として望ましいものとは思わないだろう。人類が完全に消滅するのに比べればマシであるかも知れないが、そういうかたちで人類が存続することが妥当な選択とは思わないだろう。これまで人類が築いてきた文明や知的遺産は一切失われてしまったが、とにかく人類という生物種は存続している——こういう状況を多くの人が支持するとは思わない。漠然と我々が考えているのは、そこまでして人類が存続しなくても良い、ということであろう。地球そのものが消滅するか、人類の種としての寿命が尽きるといった場合には、従容と運命を受け入れた方が良いのではないかと多くの人は考えるであろう。

このように考えるなら、むしろ地球や人類の存続に終わりがあることを前提とする方が現実的であり、その前提のもとで、世代間の公平をはかっていく方が、より倫理的だということになる。すなわち、環境倫理の主たる目的は人類の存続ではなく、地球環境の有限性と人類の命運そのものの有限性を前提にし

て、世代間の公平をはかることにあるのである。

#### 四 「無常」の倫理へ

もっとも、そのように考えるとすると、次のような問題が生じてくることになる。人類消滅の時期に生まれ合わせた最後の人類は、どのように生きるのが良いのだろうか。我々は無意識のうちにも、自分の死後にも人類が存続していくことを当てにして生きている。自分の行為は、単にそれだけのものとして終わるのではなく、人類の歴史（たとえ近親者の思い出に過ぎなかったとしても）の中で何らかの意味を持っていると考えている。しかし、最後の人類にはそのように考えることが許されていない。人類そのものが消滅するという時、人間の行為にはどのような意味があるのだろうか。

これは、言い換えるなら、人間の存在や行為の究極的な意味とは何なのか、ということでもある。このような問いはあまりにも大時代なものであるかのように見える。しかし、このような次元に踏み込まない限り、環境倫理は対症療法の域を脱しないように思われる。ヨナスも「形而上学が倫理学の土台とならなければならない」と言っている<sup>5)</sup>。しかし、ここで要求されているのは、存在から存在の当為（何かが存在しなければならない）を導くヨナス流の存在論ではない。もし人類の存続がそれ自体として追求されるべき目標であるなら、既に述べたように、我々は挫折を運命づけられている。人間存在を含め存在するものが、いづれは必ず消滅することを前提として、人間の行為や存在にはどのような意味があるのかを明らかにするような形而上学こそが必要である。

「諸行無常」を説く仏教は、このような形而上学を提供できる可能性がある。仏教の基本的な立場は「一切皆苦」であり「涅槃寂靜」である。「一切」とは文字どおり一切であり、我々が経験する楽も苦も一切が本質的には苦だというのである。「涅槃」とは、このような一切の消滅した状態であり、誤解を恐れずに言えば完全な「無」である。ここには、有を善とし、有の維持を当為とする一神教的伝統とは、全く異なる存在観がある<sup>6)</sup>。この立場では、無こそが有の目的である。完全な無に到達するために、有は修行するのである。この観点を人

類全体へと拡大するなら、人類の存続とは、消滅へといたる修行なのである。必ず消滅することが分かっているにもかかわらず人類が存続すべきであるのは、消滅を自らの解放として理解できるための修行期間が必要だからである。このように言うともあまりにも宗教的すぎるが、要は人類の消滅が必然的であるなら、それを受け止めることのできる枠組みが必要なのではないかということである。それこそが、「最後の人類」に対する最大の貢献となるのではないだろうか。

注

- 1) Hans Jonas [1979] *Das Prinzip Verantwortung: Versuch einer Ethik für die technologische Zivilisation*. Insel Verlag: Frankfurt am Mein. (邦訳) 加藤尚武監訳 [2000] 『責任という原理：科学技術文明のための倫理学の試み』、東京・東信堂、20頁。
- 2) 松井孝典 [2008] 宇宙から見た「地球」と「人類」の未来、『潮』2008年1月号、65頁。
- 3) 服部正平 [2005] 『ヒトゲノム完全解説から「ヒト」理解へ：アダムとイヴを科学する』、東京・東洋書店、277-278頁。
- 4) John Passmore [1974] *Man's Responsibility for Nature: Ecological Problems and Western Tradition*. Duckworth: London. (邦訳) 間瀬啓允訳 [1979] 『自然に対する人間の責任』、東京・岩波書店、131-132頁。
- 5) 注 i 前掲書、ix 頁 (英語版への序文)。
- 6) この観点からは、生殖や生存そのものへの新たな問いかけが可能となる。多くの宗教的伝統において、生殖の結果としての誕生は、それ自体として善であるが、仏教はこのような観点を持たない。ここからは、生殖医学や人口問題に対する根本的な問い返しが生まれる。その一端については、拙論「デザイナーベイビーは王舎城の夢を見るか——生殖をめぐる倫理と仏教」(二〇〇八年九月五日、日本印度学仏教学会第五九回学術大会・第四パネル「現代人の「いのち」と仏教」で発表) で論じた。

(まえがわ けんいち・研究員)



## The End of Earth and the “Last Human Kind”: A Critical Reflection on Inter-generation Ethics

Ken’ichi Maegawa

In many cases, only after long time have environmental problems had their effect on people. Because of this time lag, people or generations suffered with troubles cannot blame the former generations who have passed away yet. Considering such a situation, we should construct a new model of ethical behaviors to solve environmental problems, which is called “inter-generation ethics.” Many people agree that we should protect natural resources and environment for the next generations. But there are many problems in this idea. Even if we human kind do our best, natural resources such as oil and metals will be increasingly lost and finally disappear some day. We cannot avoid inequity between generations as long as the human kind continues to exist. Moreover, though we succeed to protect natural environment, the human kind will necessarily end because of the change of the solar system itself and/or genetic changes. So, if we want the everlasting continuation of human kind, this ideal is destined to fail. So, the main aim of environmental ethics is not succession of generations, but how to respond to its necessary end. To put different way, we should ask the ultimate meaning of man's existence with presuming that history of human kind will end some day. For this purpose, Buddhism can play an important role. From Buddhist point of view, existence itself is not intrinsic good. Nirvana, purpose of Buddhist practices, is an absolute nothingness. In this view, ultimate meaning of human existence is to become mature to accept its nothingness as salvation. If we accept Buddhist viewpoint, the end of human kind can be regarded as global nirvana.